

虫屋の性



一般社団法人九州病虫害防除推進協議会 常務理事
堤 隆文

Takafumi Tsutsumi

【最初に言い訳】

最初にお断りしておくが、この文は小生の趣味（主に「虫屋」としての）に関する勝手な思い出話なので。興味のない方はここで読むのを止められることをお勧めする。

小生の虫屋歴は長い。学生時代は「アマチュア虫屋」としてマイコレクションを増やすことにひたすら情熱を傾けてきた。長じては、「プロの虫屋」となり、福岡県農林業総合試験場で22年にわたり果樹害虫の研究に携わった。

試験場時代、県庁のお偉いさんに「君ら虫屋は変人やからなあ」と言われたことがある。しかし、虫屋は「変人」ではない。虫屋は対象物への探究心が尋常でないため、その行動に世間は「そこまでやるんかい!」と驚いて、変人と評しているだけのことである。これは他の研究者や職人、技術者にもままあることで、虫屋に限ったものではない。

また、虫屋は、虫だけでなく、興味を持てば虫以外の物に対しても際限なくのめり込んでいくことがままある。そうなれば、いわゆる「マニア」または「オタク」的性質を帯びてくる。これも虫屋の一面であることは確かだ。かくいう小生は、その典型とでもいべき一人で、「遊びをせむとぞ生まれけむ」という言葉を頼りに、興味の湧いた物には片っ端から手を出し、のめり込んでしまった。嗚呼、これが「虫屋の性」というものか!

【初源の記憶】

小生の最も古い虫の記憶は保育園時代にまで遡る。保育園の裏にあった神社の石垣の際に生えていたイネ科の雑草についていたマルカメムシ類の幼虫（その時はもちろん名前など知らないが）を捕まえて遊んでいて、手についた匂いを嗅いだことを覚え

ている（嫌な感じはしなかったと思う）。また、神社の半枯の樹の周りを飛ぶヤマトタマムシのキラキラを飽くことなく眺めていた。ある日、小学生のお兄さんがどこかで捕まえてきて見せびらかしていたのを見て欲しかったが、上空のタマムシにはなすすべもなかった。ところがある日、珍しく朝早く保育園に行くと露に濡れた下草にタマムシが止まっていた。見つけたときは本当に心臓がドキドキした。捕まえて手に取ってしばらく眺めたりしていたが、両手に挟んでもむとカラカラと音がし、良い匂いを発することを発見して、またうれしくなったことを覚えている。

【キタ・セクスアリスの頃】

小学生の頃はラジオ体操の後にセミ採りに興じ、田舎でカブトムシやクワガタムシの類を採って喜んでいる普通の「昆虫少年」であったが、中学生になると同好の友達ができ、虫に関する知識も少しは増え、より詳しく虫を知ることに関心を覚えて「虫屋」という自覚が膨らみ始めた。珍しい虫に対する憧れと、これを何とかわが物にしたいという欲望が沸々と湧いてきた。また同時に、人並みに人間の「雄」としての本能が蠢き始め、性的な欲望が自然と頭を支配し始めた。同級生の子供にもてたいという思いから始まり、街でミニスカートのお姉さんをみかければパンツが見えないかとドキドキしたり、家で親が寝静まった後、自室でこっそりエロ本を見てオナニーをしたり、テレビのボリュームを落として11PMを見たり、ベッドの中でイヤホンをしてお色気深夜放送を聞いたりして妄想を膨らませた。その結果、満たされることのない2つの強い欲望は、思春期の神経に大いなるストレスを及ぼし、時折心を、「目的のためなら手段を択ばず」という場当たりの

で軽薄な思いが支配するようになった。そうなるに従い、小生は自分自身の軽薄さへの苛立ちと周囲からの疎外感を感じながら、「周囲の輩は吾輩の高邁な考え（本音は、珍品を採りたい、女子にモテたいという願望であるが）を理解しえない」と開き直って「煩惱の世界」に没入していったのである（このへんが、教科書にあったヘルマンヘッセの名作「少年の日の思い出」の主人公と違うところである）。

ある夏の授業中、暑さにボーッとしながら外を眺めると、灼熱の校庭を1頭のモンキアゲハがひらひらと飛んで行った。眩しい陽射しと、レモンイエローの斑紋を持つ真っ黒い蝶の姿を今でも鮮明に覚えている。「美しい蝶がいる。蝶の美しさというものはない」。その日見たモンキアゲハは美しかった。

【萌芽期】

高校生になると幼い自意識の芽生えとともに周囲とのギャップをより深刻に考えるようになった。そして、これを克服するには中学生時代に少し教科書で読みかじった精神世界（今でいう二次）の中から活路を見出すしかないと思い込み、この時から3年間、通学途中の本屋にあった文庫本を哲学や詩集中心に洋の東西を問わず片っ端から読み漁った（もちろん、こっそりエロ本も）。最盛期には1日1冊のペースで乱読したが、「本を買う」というと親もあまり文句を言わず金をくれるので小遣いに不自由はなかった。

この頃読んだ中で最初のお気に入りには老荘思想に関する本で、「莊子」には途中でついていけなくなったが、「老子道德経」の冒頭「道の道とすべきは常の道にあらず、名の名とすべきは常の名にあらず」でコロツつといかれてしまった。その逆説的な論法と全体に漂う何物にも固執しないゆるい感じは、この頃の小生の感情を満足させるに十分であった。もう一つ、授業で習った漢詩の描写の美しさにハマった。王維の「渭城の朝雨輕塵を潤す」といえば柳のそばを燕でも飛んでいそうな初夏の雨上がりの風景がみえるし、白居易の「温泉水滑らかにして凝脂を洗う」とくれば湯けむりの中に浮かび上がる楊貴妃の豊満な肉体が色っぽい。また、唐詩選には選ばれてないが、有名な「江南春望」は字ズラを見るだけで中国南部の美しい春の風景が目の前に広がる。

日本の古典にも興味がわき、手に入る限り古事記から順に大鏡まで読破しようと試みたが、「源氏物

語」は途中から円地文子訳に日和ってしまい、「堤中納言物語」で力尽きた。堤中納言物語は平安末期に編まれた有名な短編集で、その中には「虫愛ずる姫君」という有名な物語があり、親も心配し、周囲からは変人扱いされながらも健気に自分の考えを貫き虫をかわいがる「元祖女性虫屋」というべき按察使大納言の姫の姿勢に小生は、心の中で「そうだ!」と叫び拍手をした。ほかにもみやびな物語が多く「貝合わせ」などは読んでいて幼い姫君とその周りの子供らのかわいらしさに胸がキュンとなる。

乱読の極めつけは、清代に蒲松齡という人が、古くからある中国各地の怪談話などをまとめた「聊斎志異」で、道教的な世界にドハマリした。この本は、その後も繰り返し繰り返し耽読した。善人、悪人、紳士、金持ち、貧乏人、王様、遊女等々、さまざまな人間とキツネ、幽霊、妖怪、仙人、神様等が織りなす「世俗模様」は多様性に富み、怪談話や勧善懲悪物だけでなく、笑い話から胸キュン話まで（下ネタはなかったと思うが）実に面白い（これには、記者の柴田天馬氏の深い漢籍の素養に基づく分かりやすい意識によるところが多かったのではと思う）。芥川龍之介など多くの文士がハマったのも頷ける。ちなみに司馬遼太郎氏は小生が読んだのと同じ柴田天馬訳のファンだったらしい。すべての物語が短編なのもよい。是非一読をお勧めする。

昆虫採集では、甲虫類、中でもカミキリムシに熱を上げ、いっぱしの「カミキリ屋」気取りだったが、活動範囲はせいぜい大分県の九重山地くらいまでで、普段は地元でコツコツ採集するしかなかった。

学業と関係ない本の乱読とカミキリ採集熱のため、1年の時には赤点が続き留年しそうになったが、3学期には少し頑張って何とか赤点をクリアし、無事2年生となった。2年生の中頃には乱読により少し広がった世界観と分野は違えども同じような思いを共感してくれる「ご同輩」もでき、精神的に少しは落ち着いてきた。また、「昆虫同好会」という自分の居場所を見つけ、同好の大人と交わる機会を得たことは、自分のしてきたことが社会的承認を受けたような気がしてうれしかった。そんな中、師匠と仰いでいた大先輩から、コツコツと採集してきた地元の甲虫類をリストとしてまとめて地域の博物学同好会の会誌に投稿するようにとのおおせがあり、これまでにない高揚感を持って執筆した（これは後日

福岡県の昆虫リストが作成される際に文献として引用された)。自分の書いた文章が初めて載った本を開くときは、何か恥ずかしいような気持ちとともに胸のときめきをおぼえた。思えば、これが小生の処女論文だった。

【いざ沖縄へ】



大学は沖縄の「琉球大学農学部農学科」に進んだ。地元の九州大学に行くつもりだったのだが、「旺文社模試」の推奨するこの学校を選んだ。

でも、本当は別の理由があった。実は高校3年生の頃から、当時の「京浜昆虫同好会」のF氏が発行していた「カミキリニュース」という情報誌（青焼きコピーだった）を愛読していた。この頃のカミキリ界は72年の沖縄返還を受けて未曾有の沖縄ブームとなり、関東を中心に多くのカミキリ屋がこぞって遠征していた。カミキリニュースには「新記録」、「ニュー出た!」（新種発見のこと）の文字が踊り、田舎カミキリ屋の小生は大いに刺激された。そこで小生は「流行に乗り遅れまじ、珍品を山ほど採集し、ニューも採るぞ!」と鼻息荒く宣言し、カミキリ界で一旗揚げられるべく沖縄に向かったのである。

沖縄は良いところであった。いきなり、あの抜けるような濃い青空と強烈な陽射しの洗礼を受け、高校時代までの精神的な苦悩が消滅した。しかし、それは問題が解決したわけではない。言ってしまうと、最初の1年間は扇風機さえない生活を送ったため、暑さとの戦いで体力を消耗し、つまらない悩みを考えるエネルギーが残らなかっただけのことである。

また、「ナンクルナイサー」という言葉を知り、泡盛の若干の助けのもとに、精神的な問題はそれに丸投げすることとしたことも大きい。

入学すると早速、昆虫関係のサークルを探して情報収集をしようと思った。サークルはあった。その名前は「琉大病理・昆虫クラブ」という。アマチュア虫屋からすると大いに違和感をおぼえるサークル名であった。ともかくも入部すると小生と同じような動機で沖縄に来た虫屋が何人か集まっていた。しかし、カミキリ屋は小生1人で、沖縄のカミキリに関する現地情報は皆無であり、相変わらず東京のカミキリニュースに頼るしかないという体たらくであった。F氏の後を受け発行人となった友人のO君からは地元の採集情報を早くという催促が矢のように届いていたので、採集に行くたびに駄物ばかりでも成果を送っていたが、これが数回続くと「イモ」というアリガタイ称号を賜った。これにより、小生の名は沖縄の「イモ堤」として全国に知れ渡り、多くのカミキリ屋の友人が訪ねてくるようになった。彼らは大学の寮やアパートで一夜の宿（時には恐ろしい室内採集も）と現地情報を得て採集地に向かった。その後「イモ堤」は進化し、これまで数頭しか採れてなかったニジモンサビカミキリの採集法の確立、数多の新記録や珍品ゲットを連発して現地の情報とともに本土の友人に供給したため、最後の頃にはカミキリニュースの見出しも「大先生」に昇格となった。そんなこんなで、最終的には当時の琉球列島のカミキリムシを亜種レベルで94%集めた。そ



オキナワチビトラカミキリ *Perissus tsutsumii* (荒井孝雄氏提供) 自分の名前が付いた唯一のカミキリ

の中から、採った瞬間「これはニュー（新種）だ！」と直感したカミキリを九州大学の横原博士に見せたところ、新種として記載してくれた。和名はオキナワチビトラカミキリ、学名は *Perissus tsutsumii* と命名してもらったので、「イモ堤」はカミキリ界に足跡を残すことができた。

【ラン、蘭、乱】

沖縄から帰りバイトしながら職探しをしていると、運よく福岡県の中途採用試験にひっかり9月から勤めることとなった。最初は出先機関で行政の末端事務を担い、その後病虫害防除所を経て農業総合試験場病虫害部に異動した。

虫のほうはというと、最初の2、3年は学生時代同様励んでいたが、仕事で虫を扱いだすと、趣味のほうは自然と遠のいた。しかし、「虫屋の性」は健在で、虫の代替として「寒蘭」にハマった。実は、虫の世界の師匠が幾鉢かの寒蘭を栽培しておられ、虫の話とともに寒蘭の話も自然と聞いていた。そしてある日、自宅にうかがった時咲いていた地元産の寒蘭の花と香りにいたく感じ入り、「虫屋の性」が騒ぎだした。早速、師匠の紹介で地元の寒蘭愛好会に入り、最初は毎月の例会で怪しい蘭商人が持ってくる寒蘭を購入したりしていたが、そのうち持ってくる寒蘭の怪しさに気づいたことと、会の人々が誰も持っていない名品が持ちたくて、寒蘭の本場に直接出向いて購入するようになった。当時、名品と云われる寒蘭はバカ高く、一鉢数十万円から数百万円した。従って、なけなしの給料の大半が寒蘭につき込まれ

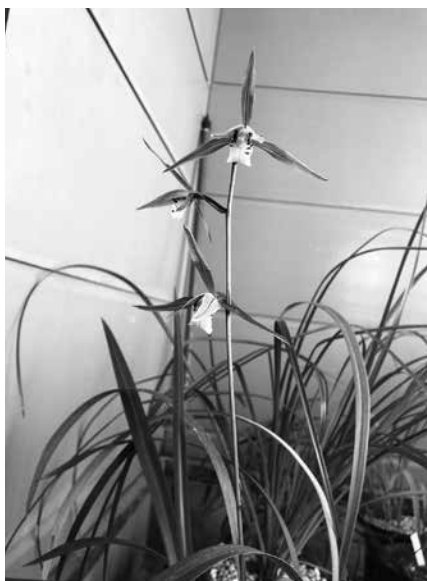
た。例えば、冬のボーナス25万円を握りしめた小生は鹿児島本線の特急に飛び乗りはるばる鹿児島県出水市に行き、欲しかった「白妙」という名品の小苗を、蘭商人を拝み倒すようにして買ってきた。この苗は10年後に無事「白妙」が開花した。

しばらくすると、寒蘭のほかに「春蘭」も栽培するようになった。もともと春蘭は関東が本場で、九州ではマイナーであったが、バブルの頃に文字通りバブリーに流行しはじめた。2週間前セリで買った春蘭を別のセリで売ると3倍になったこともある。もちろんこれはバブルの崩壊とともに正常に暴落したが、この間多くの名品が発掘され、以後の発展に役立った。小生も対馬にルーツを持つ先輩の導きで対馬を中心に自生する蘭の採取に励んだ。対馬では寒蘭は高く売れることが知られていたためすでに少なくなっていたが、春蘭は特産の「ツシマニオイシュンラン」以外は省みられることなく、日本春蘭はそこら中に自生していた。そこで、花時期に地元の人に案内してもらい、自分の目利きで、見どころのある花を採取したり、寒蘭の片隅で栽培されている春蘭を分けてもらったりしていた。小生が目利きした対馬産春蘭の中からは、後に「名品」として普及した蘭が幾つか出てマイコレクションの充実に貢献した。そして、あれやこれやで最盛期には約200鉢の蘭を栽培するまでになった。しかし、二十数年前家を建てる時に栽培用ガラス室の建設費用を捻出するため結構売り払い、今はこのスペースに合わせて春蘭を中心に60鉢程度を楽しんでいる。

蘭を栽培していて一番困るのは、毎年鉢数が増えることである。数年おきに本数が増えすぎた蘭を「株分け」して1鉢の本数を調整しなければならない。手間と費用もかかるが、それ以上に問題なのは、増えた鉢の置き場がなくなることである。増えた蘭を放置して枯らすのはかわいそうだから、蘭の栽培を趣味とするには、増えた蘭を適切に処分してくれる商人の確保が最も重要である。

【骨董入門】

小生の住む福岡県飯塚市周辺には焼き物の産地が多い。その一つに慶長年間に起源をもつ「上野焼（あがのやき）」がある。ある時友人らと近くに遊びに行った帰り、ついでに何軒かの窯元を見て回った。その時、一軒の窯元の焼き物が頭抜けて美しいのが目にとまった。それに加え、美大出でキレッツ、キ



無銘サラサ寒蘭（長崎県白西平産）



上野焼徳利部分（熊谷保興造）

レのご当主の語る「美しいモノ」に関する話に引き込まれ、茫然として店が閉まるまで居続けた。そんなことがあって、その窯元（熊谷本窯）には以来足しげく通うようになり、今でもときどき顔を出している。

時には桃山時代の茶碗や世界に数点という貴重な磁器も手に取らせてくれ、陶芸家の視点からその美しさを具体的に解説してくれるのでご当主の話は素人の頭にもスッと入りやすかった。小生にとって正にこの場所は、青山二郎の「青山学院」ならぬ熊谷保興の「熊谷学院」であった。

やがて当然のごとく、熊谷学院における学習の中心はご当主の収集した骨董に関することに流れていった。ご当主の鋭い、そして独特の、審美眼で選ばれた物は、例え陶片であっても力が満ち溢れており魅力的であった。

「虫屋の性」はまた暴走しはじめた。しかし、蘭における多少の経験は、この世界に闇雲に飛び込む危険性の高さを警告したので、まず骨董関係の本を買い漁り乱読することから始めた。古陶磁に関する専門的な本とともに、骨董界のブランドであった白洲正子の随筆も読んだ。そして、そこに登場する青山二郎、小林秀雄、川端康成らに興味を持ち、彼らの作品やその周辺の文士の作品も読むようになった（川端康成だけは、ちょっと読んだら文章が怖かったのですぐに止めたが）。これら先達の教えに共通するものは「昼の上の水練では泳ぎは上達しない。骨董は実践あるのみ。まず、買え！」ということで

あった。「買った物を常に身の回りに置き、眺め、いじって、徹底的に付き合っ初めて骨董は口を開いて語ってくれる」ともいっている。これは学費が高そうだと直感し背中「アンビリカブケーブル」を切断したが、「暴走モード」に突入した「虫屋の性」を止めることはできなかった。爾来、暴走モードは継続しているが、幸い、蘭に関する方は活動を停止したため、身の破滅をかわり免れている。それどころか、骨董を始めた最初の頃は蘭を売った金で購入の軍資金になり大変助かった。

この道の常として、まず「骨董市」通いから始め（30年前は骨董市でも時には「うぶ荷」が出ることがあり、本物の古伊万里も結構安く買えた）、地元の骨董屋にも通うようになったが、品物が少なく値段も高いので、仕事で東京、京都、大阪等に出張した際に骨董情報誌を片手に店を訪ね歩いた。その結果、よい骨董は東京に集まっており、品物も豊富で価格も安いという結論に達した。

昔、本郷3丁目の小さな雑居ビルの2階にRという桃山から江戸初期の志野、織部、唐津、初期伊万里の発掘物を主力とする店があった。店主のAさん（たぶん、これらの焼物に関しては日本一の目利き）に教えを乞うと、店にある実物を手に取りながら時代の特徴や真贋の見どころを具体的に教えてくれた。数点しか買ったことがないが、今でも顔を出せば親切に接してくれる。このように、東京には専門性の高い骨董屋があり、たいいどこも親切に対応してくれるので大いに勉強できた。



初期伊万里盃(江戸初期)見込みに昆虫が書かれている珍品

ヤフオクも役に立った。最初の頃は家で使う古伊万里の食器などをおっかなびっくり買っていたが、だんだんと他の物も買うようになった。アンティーク陶磁器の分野は、出来のよい新物も多く混じっているの、画像で確実にわかるもの以外は、東京に店がある昵懇のKやTといった顔見知りの出品者の物しか買わないが、極稀に、街のリサイクルショップと思われる出品者から思わぬ物が出たりするので、気になるものは一応チェックしておく必要がある。昔、サザビーズの売り立てカタログと同手の古染付（明末～清初の磁器）の名品の盃が出ているのをみつけたことがある。商品タイトルに「古染付」という表記がなくキーワード検索では引っかからないので、ここは古陶磁好きもノーマークだろうとたかをくくりルンルンで入札したが、終了間際に高騰し競り負けてしまった。ネット社会は広い、見ている人は見ているものである。

【茶の道はヘビィ】

熊谷学院に通い始めたころ、茶道も習い始めた。古陶磁と茶道は切っても切れない関係にあり、骨董をやると決めた以上、茶道は4単位の必修科目であった。そもそも、上野焼は「利休七哲」の一人である細川忠興が豊前小倉藩主の頃、「国焼き」として開窯したものであり、江戸初期には幕府筆頭茶頭である小堀遠州好みの茶器を焼く「遠州七窯」の一つとされた。

茶道は師に恵まれた。この出会いがなければ1年もしないでやめたであろう。入門してすぐ、先生の執着に恐れ入ったことがある。ある秋の夕刻、茶花の話をしていると「女郎花」の話題になり、近くの高原で見ごろであるということがわかり、今から見に行こうということとなった。すでに陽は傾いており、到着したところには真っ暗になっていたが、車のヘッドライトで照らした斜面を先生がかけ登り、「ほら、これが女郎花」と採ってきた。古田織部の瀬田唐橋の擬宝珠の逸話ではないが、茶人恐るべし！ 女人といえども侮るべからず。この時、「茶の道はヘビィ」であると覚悟を決めた。

小生の経験からいうと、地元の茶道の稽古は、流派の「型」や「決まり事」を覚える練習ばかりで、そのバックグラウンドにある歴史や思想、文化、芸術について系統だって教えることはほとんどなかったようである。もちろん、「型」の習得は日本の芸道

では最も重要視される稽古で、徹底が必要なことはあるが、子供の論語の素読でもあるまいし「左、右、左」だけでは古陶磁に関心があって入門した大人は興味が続かない。

幸い、わが師のF先生はその中の例外で、周りとはたいそう違っていた。流派を超えた茶道文化や芸術の素養が深く、知的好奇心が旺盛で精神が若々しい人であった。入門したての知識先行で頭でっちな素人に対して、分かつろうが、分かるまいが自分の美意識を前面に出して迫ってくるので、時にタジタジになりながら、コチラも「負けるわけにはいかぬ」と鍛えて、拙い自論を吹きかけるとそれを喜んでくれるので、よき理解者を得たと嬉しかった。

年を経ると、自然と話題は茶道具や古陶磁のことになり、「あれは見せちゃったかね」とか、「今度これ買うたバイ」とか、最近入手したお気に入りの品の見せ合いで盛り上がるのがたびたびあった。また時々、先生が、招かれた茶事の良かった道具の話をし、その道具を中心にして二人で「空想茶事」の道具組を考えたりもした。この時ばかりは大名物も使い放題で道具組みができ楽しかった。

入門して約40年（稽古行っていない歴の方がはるかに長くなった）になるが、近年の茶事（最近は何釜しか行っていないが）の道具組みは先生の美意識と弟子に対する愛情が爆発しており、名品も惜しみなく出してくれるので面白さが頭抜けている。時に「これは隆文が喜ぶから」と初釜に小生の好きな道具を一品入れてくれたりするのでうれしくなり、いまだに淡交会費を払っている。

【書画の世界へ】

話は替わるが、「書画骨董」という言葉があるように、昔から書画は骨董と切っても切れぬものであるから、自然と手を出すようになった。昔は、ちょっとした家にも座敷に床の間があって、季節や行事に合わせて軸を架けるのが当たり前であったため、書画の需要は多く、富裕層のみならず小金持ちまで対象に大量の書画が生産されていた。ところが、生活様式が変わり、座敷や床の間が消えると多くの書画は無用のものとなった。これらの書画が流れ着いたのがネットオークションである。ヤフオクをみると、定家卿、一休さん、沢庵和尚、光悦の書から、雪舟、光琳、御舟の絵画まで、作者名だけなら国宝級の書画がズラリと並んでいる（さすがに今は、ガイドラ

インで真作保障できない物は「模写」と表示するように指導されているが)。もちろん、そんな物がそこいらに落ちているはずもなく、本物に出会う確率は宝くじより低いであろう。しかし、作者にこだわらず、自分の気に入った書画を探すにはヤフオクは絶好のフィールドである。例えば江戸中期頃までのお公家さんの字は個性的で上手い人が多い(ちなみに、小生は冷泉為村が好き)。お公家さんはみな貧乏でアルバイトをしていたが、公家のバイトは「公家諸法度」で幕府から規制されており、書画は許された数少ない職種であった。そこで皆さん生活のためカルタや色紙など何でもせっせと書きまくったので、残っている数が多い。これが腐っても鯛で、しかも、鳥丸光廣ら「寛永の三筆」等の有名どころ以外は、今は人気がないので驚くほど安い。絵画も同様である。人気の高い「琳派」の本物は手に入らぬが、当時の富裕層が花嫁道具か何かで注文したであろう土佐派の「女房三十六歌仙」は非常に上手で美しいが、画帳崩しのバラ売りで安く入手できた。

今一番関心があるのは、平安から鎌倉あたりまでの和様の書、いわゆる「古筆」とよばれる分野である。印刷技術が発達するまで本はすべて書き写しであった。お公家さん達は自家用に、献上用に、せっせと書き写本を作成した。古今集や和漢朗詠集等の歌集が多いが伊勢や源氏等の物語もある。これらは、長く各家に秘蔵されていたが、途中で流出したものも多い。そのような写本の断簡が「古筆切」である。これを収集することが江戸初期頃から上流社

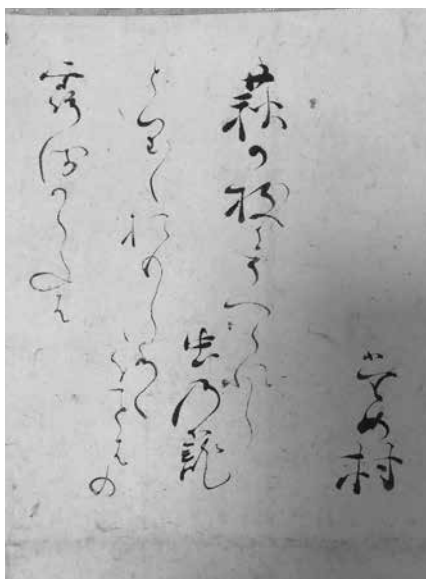


土佐派絵師による女房三十六歌仙のうち宮内卿(江戸中期)

会でブームになり、多くの古筆切を集めて画帳に張り込んだ「古筆手鑑」を作成したり、貴重な一葉を「かけ軸」に仕立てて鑑賞した。

平安から鎌倉にかけての上手の古筆切は料紙から美しく、舶来の唐紙や金銀を散らして装飾した豪華絢爛なものも多い。そして、その上にひかれている水茎の跡はまことに麗しく、正に王朝文化の粋というべきものである。であるから、当然、当時から値段は高い。となると、必然的に贋物は山ほど作成される。そこで、古筆切の鑑定を職業とする「古筆見」という専門家が登場する。その代表格に江戸初期の古筆了佐から昭和の古筆了信まで続いた古筆家がある。

古筆切にはよく「極札」というものが付随している。古筆見が発行する「保証書」のようなもので、極札にはまず「〇〇卿」等と筆者が記しており、その下に鑑定した切の冒頭部分が書かれて、鑑定者の印章が押されているのが一般的である(裏書もあり、これにも約束事がある)。でも、江戸時代の人になぜ平安時代の筆者を特定できるのか、はなはだ疑問であろう。もちろん彼らは資料を集めて勉強し、伝承、文字の特徴や料紙などから推定したのであろうが、多くの場合、「〇〇卿」と極めてあるのは、この切が書かれたであろうと推定される時代の代表者として当時の名高い歌人の「〇〇卿」を当てはめたということである。もちろん、研究の進んだ現代から見ると誤りも多いが、古筆見は切の伝承や雰囲気を経験的に判断し、「当たらずしも遠からず」の鑑定をしていたので、ある意味、それはそれで正しい。であるから、現在でも極札に極めてある筆者名



冷泉為村詠草(江戸中期)

は「伝承筆者」として尊重され、本人作でないことが明らかであっても「伝○○卿」と表示される。

もちろん、極札にも贋物はたくさんあり、はなはだしいのは本文と筆跡が同じものもあるが、一番多いのは印章の偽造である。そのため、江戸時代後期には主な古筆鑑定家の印章を網羅した「極札鑑定の手引き」のような物が発行され、その続編まで出ている。現在では、従来あまり顧みられなかった名品以外の鎌倉以降の古筆切（そのため値段はそこそこ安い）の研究も進み学術的な研究書も出版されているので、系統的に勉強しやすく、買って調べるのが面白い。

古筆切の名品の多くは昔から大事にされてきたので、文化財として取まるところに取まっているが、売り物も無いことはない。現在は江戸時代ほどブームでもないで、平安時代の超名品を除けば値段もバカ高くなく、辛抱強く探せば国宝の手鑑に貼ってある鎌倉時代の古筆切の続き（「ツレ」という）の一葉くらいは入手することも不可能ではないところに夢がある。とはいっても、ヤフオクで探すものではない。

【虫への回帰】

試験場には勤め続けたが、50代になると管理職に回され現場の虫たちと疎縁になった。病害虫部長時代はまだ良いが、研究企画部長以降は仕事で虫と接する場面が全くなくなってしまった。そうになると、無性に虫が恋しくなり、「そうだ！昔採り損ねた沖繩のカミキリを採ろう」という年寄くさい思いが頭をもたげてきた。しかし、今更、マイコレを再開する気はサラサラなく、ただ純粹に、採りたいという欲望のみであるので、採ったものはすべて現役の虫屋さんにあげることにした（採集道具を借りなきゃいけないし）。

ターゲットは2種類である。一つは西表島のジャングルに生息するベニボシカミキリ。シャアズマブルの「赤い彗星」にも匹敵する美しくも手ごわいカミキリである（ルリボシとは違うのだよ！）。そこで、ネットでの情報収集に加え、後輩の現役カミキリ屋諸君のお力を借りて最新の情報を精査し、これならいけそうだと確信して2014年5月末西表島に上陸した。梅雨末期の原生林に分け入り、気温30度、湿度100%のジャングルをひたすら徘徊しベニボシを求めてオキナワウラジロガシの大木の立枯



西表島で採集した「赤い彗星」ベニボシカミキリ

や倒木をめぐる採集法は50代にはなかなか骨の折れる作業であったが、疲労困憊で徘徊する中、突然目の前の立ち枯れに2頭のベニボシが現れた。その赤い体は幹の色と同化し、見事に保護色として機能しており、手でつかむまでは幻を見ているようであった。39年前の思いを遂げ「為せば成る」と気を良くした小生は「俺もまだまだイケルじゃん」と鼻の穴を目いっぱい広げて、次のターゲットに向かうこととした。

次に狙ったのは、通称「ヤクネキ」ことヤクシマホソコバネカミキリである。本種のように蜂に擬態したスマートなカミキリ（ネキダリズ属）は業界で「ネキ」とよばれ別格の人気がある。その中でもヤクネキは最大の人気があり最大の難関である。まず、屋久島特産であること。発生時期が7月の約15日間程度であること。毎年、多くのカミキリ屋がチャレンジするものの、採れてもせいぜい2～3頭でゼロの年もある。また、採れるポイントが1カ所であり、ヤクネキが飛んでくる狭い空間を巡って採集者が集中し競争が厳しいこと等々。

そこで小生はヤクネキ採集のために目標を一つに絞った。すなわち「飛んでくるヤクネキを独占できるマイポイントを発見すること」。そのため、1970年代からの採集記録の精査、ネット上のグーグルマップ、SNS、国土地理院地図等を駆使した地形及び樹相調査、現役虫屋からの最近の現地情報等々、事前調査に数年を費やし、満を持して2019年7月17日、42年ぶりの屋久島遠征を決行した。

結果を先に言うとヤクネキはとれなかった。原因は、この年はカミキリの発生が極めて不作であったこと。梅雨明けが遅く7月末まで天候が不順で遠征期間中ヤクネキが飛びそうな好天の日がなかったこと。などがある。結局、この年は誰もヤクネキを採れなかったようである。しかし、事前に選んだマイポイント候補の中から有望そうな場所の選定もでき、ヤクネキ以外の屋久島らしいカミキリである

アラカワシロヘトラ熊毛亜種やクロソンホソハナ、モウセンハナ等とも42年ぶりに再会できたのでうれしかった。もともと、1回の遠征でヤクネキを採集できる確率は極めて低い。今年の実験を基に来年もチャレンジし、ヤクネキを採集するまで屋久島通いを続けると固く誓うのであった。

虫屋ノ性ハ、イマダ衰エタルヲ得ズ、ワレ健在ナリ、オクレ……。